

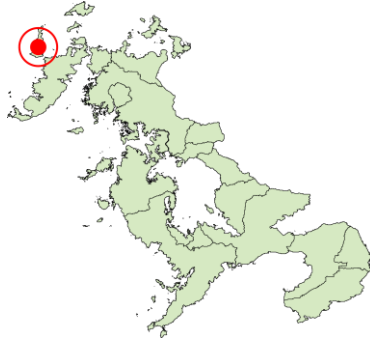


藻場保全に係るダイビングサークルとの連携

館浦藻場再生協議会

地域の現況・課題

館浦地区は、長崎県平戸市の平戸島の北西にある生月島にある。産業は、漁業が主体で、大中型旋網、大型定置網、イカ釣り、船曳網、一本釣り、海士や採介藻漁業などが営まれている。



地区の海岸線は岩礁域が多く、そこに藻場が広がる。しかし、近年の気候変動による水温上昇や、ウニ類や植食性魚類による食害の影響などで、藻場が大きく減少した。

当地区において藻場は、カサゴ、カワハギ、アワビやサザエなど沿岸域に生息する様々な水産資源を育む重要な生産基盤であり、その回復は喫緊の課題となっている。

学生との連携の経緯

当地区における藻場の減少は、平成初頭頃に始まり、平成5年から磯焼け対策が講じられるようになった。しかし、その後も続く、水温上昇や、ウニ類・魚類による食害などで藻場の回復はなかなか促進されなかった。そこで、平成25年度に漁業者や地域住民で構成した「館浦藻場再生協議会」を設立し、保全活動の強化を図った。

当会の保全活動は、今年で11年目を迎える。長年に亘る活動のおかげで、ホンダワラ類を主体とした藻場の回復が確認できるようになった。しかし、一部の海域で藻場の回復が低調で、現在、課題となっている。

当海域で藻場の回復が遅れている理由は、沖の深場から多くのウニ類が浅場に侵入してくることが一つの要因に挙げられ、現在、その対策が新たに求められている。



ウニ除去活動

母藻の設置（延縄式）

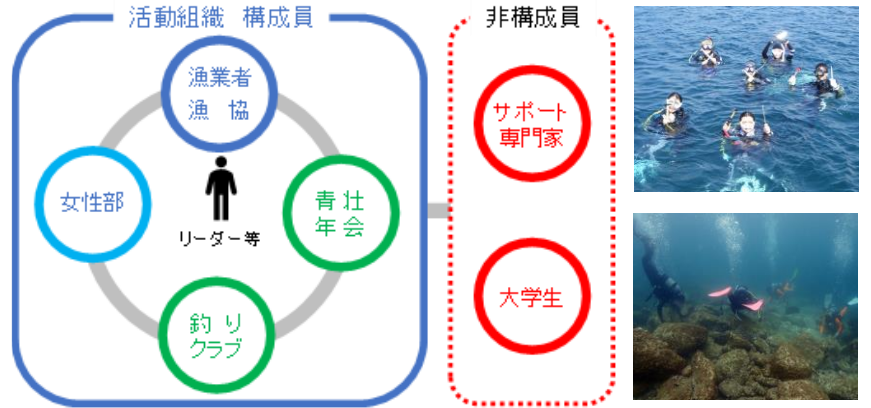
植食性魚類の除去

学生との連携体制づくり

当会の体制は、活動当初から漁業者・漁協・女性部だけでなく、地域の青壮年会や釣りクラブで構成し、海上作業は漁業者中心、岩盤清掃などの陸上作業は地域一体で取り組んでいる。

また、海上作業のうちウニ類の除去活動は、素潜り漁を行う海士が担当が、深場の活動に必要なスクーバ潜水の技術は残念ながら有していない。そのため、課題となっている沖のウニ類を除去するためには、その技術を要する新たな人員の確保が必要となる。

そこで、以前から技術指導してもらっていた水産多面的機能発揮対策事業のサポート専門家に相談した。その結果、県内の他海域でウニ除去活動のボランティアを行う大学のダイビングサークル「ISANA」との連携を進められ、その体制を専門家の協力のもと構築した（当該事業の個別サポートを活用）。



主体	各主体の役割
漁業者	保全活動の主体。
漁協	事業の運営。構成員や非構成員との調整。
女性部	保全活動（岩盤清掃等）における作業支援。
青壮年会	保全活動（岩盤清掃等）における作業支援。
釣りクラブ	保全活動（岩盤清掃等）における作業支援。
サポート専門家	保全活動における技術支援。学生の案内、指導等。
大学生	保全活動（ウニ類除去活動）における作業支援。

学生との連携による取組

ISANA とのウニ除去活動は、夏休み期間の8月に1回実施。

除去活動は、構成員である海士が素潜りで浅場、学生が深場を担当し、作業を行う。また、海士はスクーバ潜水できないことから、個別サポートを活用し、当日専門家に現地に来てもらい、学生に対し除去方法の指導や安全に関する指導・管理を行ってもらう。

作業の工程は、学生が長崎市内に住んでおり、当地区までの移動に時間を要することから、1泊2日とする。プログラムの内容は、1日目の午後に現地に集合してもらい、①自己紹介、②館浦の漁業の紹介、③当地区の磯焼けの現状と対策、④作業内容と注意事項の説明をし、⑤ウニ除去活動を実施する。帰港は夕方、その後、漁協の好意で夕食会を開き漁業者と交流を深めてもらう。また、2日目は移動日にあたるが、午前中に定置網の見学などしてもらっている。



身近で漁がみれた！人生初体験。楽しかった

教科書で学んだことを直接感じれた！

連携の効果と今後の方針

学生と連携したウニ除去活動は、令和4年から開始した。これまで浅場だけの除去活動であったが、連携により沖側の活動も可能となり、1.5千個程度のウニ類が深場で除去できた。ただし、深場のウニの生息密度はまだ変化しておらず、継続した取組が求められる。

現在、6名の学生が活動に参加してくれている。今後は、より多くの学生、また専門家を通じた取組ではなく、サークルの自主的な取組として、当連携が発展できればと考えている。